

社員の皆様へのメッセージ

株式会社 イナテック

代表取締役社長 稲垣良次

2015. 1
No.257

“あけましておめでとうございます”

昨年は、社員の皆様、御家族の皆様には大変お世話になり、ありがとうございます。皆様の努力のおかげで本年度計画のマスタープラン通りに実績を上げていただいています。本当にありがとうございます。

ただ、お客様への品質不良が昨年度実績の倍のいきおいで推移しております。まず、落ち着いて足元の日常管理を徹底して、イナテックの“使命”である『お客様に100パーセント良品をお届けして、お客様に感動していただき、喜んでいただく』ことを全社員で徹底しようではありませんか。

幸いにもAW様のイナテックに対する印象は“まじめ”一所懸命“という評価ですので、いち早く結果を出すことが大切です。皆さんの御協力をお願いいたします。

“同じことを言い続ける”

二〇一五年の新年にあたり思うことは、月刊致知十一月号『稲盛和夫に学んだこと』というテーマの森田直行会長の記事です。

『責任者というのは壊れたレコードのように同じことを何度も繰返して下の者に伝えなければいけない。』

「何度俺に同じことを言わせるんだ」という声はどこの会社からでも聞こえてきそうですが、そんなことを言っているようでは人の上に立つ人間としては失格で、むしろ“また同じことを言っているな”と思われるくらい言い続けなければならない。そうすれば言われた本人はいずれそのことを言われまいと行動することで賢くなっていく』

このような稲盛会長の考え方を見習い、イナテックの使命を一所懸命“壊れたレコード”のように皆さんに語り続ける覚悟をいたします。

“感動したイナテック木鶏同好会”

去る、二〇一四年十二月四日のイナテック木鶏同好会での出来事です。

その日は五チームで二十人くらいが参加した日でした。新入社員の八木さん、判治さん、児玉さん、日系ブラジル人の伊藤さん、経営管理課の高瀬さん、初参加の一课の山下さんなど、すばらしいメンバーでのイナテック木鶏同好会でした。

伊藤さんは今まで漢字が難しくて本も読めなかつたそうですが、今回のイナテック木鶏同好会に出席するにあたり、御自分でポルトガル・日本語訳の辞書を使って、漢字にすべてのひらがなを振り、何と六時間もかけて今回のテーマを予習されました。私も大変びっくりして伊藤さんの努力を称賛いたしました。

また、伊藤さんはここまで漢字を調べた事は初めてだったようで「漢字の意味の深さを面白く思い、楽しくなってきました。また次回も出席して皆さんと話したい」と言われました。

高瀬さんも「今までの人生の中で皆さんに自分の思いを聞いていただいた事がなかつたが、今

回皆さんとお話しできて大変うれしく思い、木鶏同好会に参加できてよかった」と感想を言っていただけでした。

新入社員の児玉さんも「この木鶏同好会は『出会い』です。色々な社員の方の考え方、思いなどお話をきて、この出会いに感謝します」とのコメントをいただきました。

様々な立場の社員たちが職制を越えて、にややかに意見を言い合えるこの場を見て、私はまるで『出会い』の花が咲いてきたように感じました。これこそまさに私が理想としていることです。

私もコメントを述べた時、想いがこみ上げてきて、うれしくて声になりませんでした。「経営」をさせていただいていたよかつたと身震いがした瞬間でした。

イナテックは、すばらしい会社に、誰もが集える理想的な会社になれると信じています。

二〇一五年も「壊れたレコード」のように一所懸命語り続けますので、宜しくお願いいたします。本年も宜しくお願いいたします。

合掌

二〇

損之又損、栽花種竹、儘交還烏有先生。忘無可忘、焚香煮茗、總不問白衣童子。

これを損してまた損し、花を栽え竹を種えて、儘く烏有先生に交還す。忘るべきなきを忘れ、香を焚き茗を煮て、総て白衣の童子に問わず。

一 これを損……— 知能を減らした上にも減らす。老子に「学を為せば日に益し、道を為せば日に損す。これを損して又損し、以て無為に至る。無為にして為さざるなし」(第四十八章)とあるによる。二 儘く……交還す——すべて……に返す。三 烏有先生——「烏有」は「いずくんぞあらんや」で、無のこと。烏有先生は司馬相如の子虚賦に見える仮設の人物。四 白衣の童子——陶淵明の故事によって言う。烏有の先生に対し、ここには童子と称した。太平御覽卷九九六に「陶淵明、嘗て九月九日に酒なし。菊の叢の中に、摘みて把に盈ち、其の側に坐す。久しくして一白衣の人を望見し、至れば乃ち王弘の酒を送るなり。すなわち就いて酌む」(続晉陽秋)とある。

知能を減らした上にも減らして、ただ、花を植えたり竹を植えたりして、すっかり烏有先生にお返しして無の境地に入る。そして、「忘れなければならぬことでもない」ということさえ忘れてしまつて、ただ、香をたき茶を入れたりして、酒を贈ってくれる白衣の童子が来なくとも、全く苦にはしない。

2
